



Title	ロールシャッハ・テストから見た解離性障害者の特徴
Author(s)	青木, 佐奈枝
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46602
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^{あお}青 ^き木 ^{さな}佐 ^え奈 枝

博士の専攻分野の名称 博 士 (人間科学)

学 位 記 番 号 第 19955 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 18 年 3 月 24 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

人間科学研究科人間科学専攻

学 位 論 文 名 ロールシャッハ・テストから見た解離性障害者の特徴

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 藤岡 淳子

(副査)

教 授 井村 修 助教授 西澤 哲

論 文 内 容 の 要 旨

解離性障害は、心的外傷性の障害の一つに数えられているが、その機制には心的外傷に対する防衛的側面と障害的側面が複雑に入り混じっており、状態の把握や支援が難しい障害と言われている。多くの先行研究において、解離性障害の、より詳しい理解が試みられているが、現段階ではまだ把握できていない部分も多い。

そこで、本研究では、主にロールシャッハ・テストを用いて、解離性障害や、解離機制が優勢に働く障害（心的外傷性の障害など）の理解を試み、その障害支援に提言を行うことを目的とした。

第一部では、解離性障害やその周辺領域の先行研究を概観し、解離の概念を明確化するとともに、現在までに明らかにになっている解離の諸特徴を整理した。

第二部では、第一部で提示された解離の特徴を軸に、解離性障害の事例検討を行った。解離性障害者の数例について、その臨床像や心理検査データ（主に、ロールシャッハ・テスト・データ）をもとに質的検討を行った。

第三部では、解離性障害のロールシャッハ・データについて数量的検討を行った。第一部、第二部で示された解離性障害の特徴を軸に、統計的な検討を加えた。この際、心的外傷との関連、解離の重篤度、解離性障害の種類の違いといういくつかの観点からも比較検討を試みた。

この結果、解離性障害者に、以下のような特徴が認められた。

- ① 解離性障害者は、元々持っている能力は高く、状況対処の意欲も高いが、状況ストレスの影響により、それらを適切に使用できず、努力するほどに不適応が生じる傾向がある。
- ② それは特に情報処理面で顕著に生じている。広く、また細かく情報入力を試み、状況を統合的に理解する努力を過剰なほどに行うが、情報の繋ぎ合せが適切に行われず、努力するほどに重篤な思考障害が生じていること。
- ③ ②には不快で複雑な情動の存在が影響している。解離性障害者は、多様な情動（主に不快情動）を内包するが、自己の情動を簡易化して捉えることをしない（あるいは出来ない）ため、その情動世界は混沌化し、情動的な混乱を呈しやすいこと。
- ④ 上述のような傾向を有するために、努力するほどに現実検討が低下することが生じ、自分自身や環境への信頼を低下させていること。

これらの結果より、解離性障害者は自己コントロールが適切に働かないため、適応への努力をしているにもかかわらず、その努力が効率的に機能しない状況にあることが推測された。支援においては、その点に留意し、本人に自己

コントロールを回復させるような働きかけが必要と思われた。

論文審査の結果の要旨

解離性障害は、心的外傷性の障害の一つに数えられているが、その機制には心的外傷に対する防衛的側面と障害的側面とが複雑に混在しており、状態の把握や支援が困難な障害である。多くの先行研究も行われているが、現段階では十分な理解と支援・治療の方法が確立されているとは言えない。本研究は、解離性障害および心的外傷性障害などの解離機制が優勢に働く障害に関し、主としてロールシャッハ・テストを用いて、その機制を理解し、障害支援および治療に有効な方法を探ることを目的としている。

本論文は、4部20章で構成されている。第1部では、解離性障害およびその周辺領域に関する先行研究が概観され、解離の概念が明確化されるとともに、現在までに明らかになっている解離の諸特徴が整理されている。第2部においては、解離性同一性障害2事例、全生活史健忘3事例、その他の解離性障害4事例、計10事例を対象に、その臨床像およびロールシャッハ・テスト結果を主とする心理検査データを用いて、解離性障害者の特徴が質的に検討された。その結果、①状況認識が漠然としていること、②着想が流動すること、③主体が曖昧であること、④感情刺激場面で現実検討力が低下すること、⑤感情表出の不自然さ、⑥対象との距離の混乱、⑦自己イメージが否定的であること、すなわち情報処理の精度が低く、思考が歪曲されており、情動統制が脆弱で、それゆえに自己肯定感も低いという特徴が認められた。第3部においては、解離性障害者36名のロールシャッハ・データについて、心的外傷との関連、解離の重篤度、解離性障害の種類の違いの観点から数量的検討が行われた。その結果、解離性障害者には以下のような特徴が認められた。①状況対処の意欲は高いが、持っている資質を適切に使用することが難しく、努力するほど不適応が生じる傾向がある、②特に、情報処理において、広く、詳細に情報を取り入れようとするが、情報の統合が不適切で、かえって重篤な思考障害が生じている、③その背景には不快で複雑な情動の存在があり、それにとらわれ、情動は混沌化し、混乱を呈しやすい、④それらの結果、努力が実を結ばず、かえって現実検討を低下させ、自身や環境への信頼も低下させている。第4部では、得られた知見をもとに、解離性障害者の支援に関し、安全と安心を前提に、本人に自己コントロール感を取り戻させるような働きかけの方法が提案されている。

本論文は、概念に混乱が生じがちな解離性障害者を実証的研究に乗せうる包括システムによるロールシャッハ・テストのデータを基に、質的、量的に検討し、その特徴を明確に描き出しており、今後の解離性障害および外傷性障害の研究と治療に有益な知見を提供している。以上により、本研究は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしい内容と判定された。